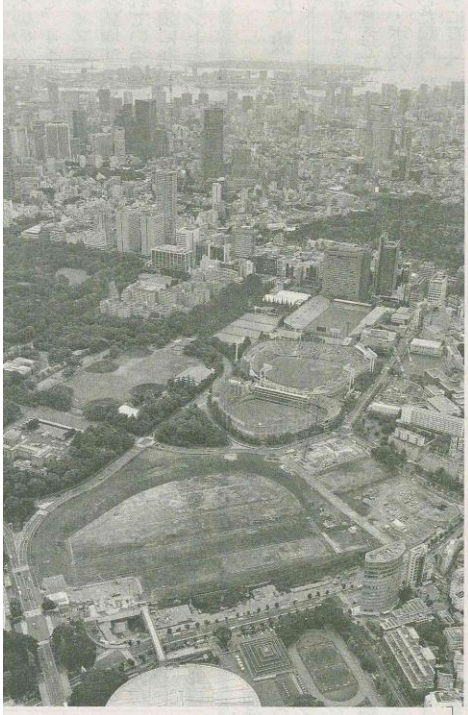
4年後のきょう開幕

東京五輪 どんなカタチに

4年後の2020年7月24日、東京五輪が開幕する。8月のリオデジャネイロ五輪の開幕前に開かれる国際オリンピック委員会（IOC）の総会で東京五輪の追加競技が正式に決まり、準備の動きが加速する。東京五輪は何を目指し、どんな大会にすべきなのか、各界の人に聞いた。



新国立競技場の建設予定地（手前）。奥は多くの競技会場が建設される臨海部（23日、東京都新宿区）

「ハコは質素で」「復興の力に」

ロンドン大会の競技場づくりなどに携わった建築家の**山嵜一也さん**（42）は「東京大会は世界中の人が来たいと思えるような演出をし、街の魅力をアピールするチャンスだ」と強調する。

ロンドン大会前、完成間近の競技場は仮設観客席があり、見栄えが良くなかった。だが、演出をこらした開会式や国内の盛り上がりを見て「どんな競技場でもドラマがあれば素晴らしい場所として記憶される。目玉は観客に見せる中身であり、ハコは質素でもいい」と気づかされたという。

山嵜さんは「五輪は開催自体が目的ではない。少子高齢化など多くの課題を抱えて五輪後を生きる次世代にどうバトンをうまく渡せるか、みんなが考える機会にしてほしい」と提案する。

五輪の歴史に詳しい筑波大体育専門学群長の**真田久さん**（60）は東京大会を「世界に貢献する五輪」と位置づける。

その一つが事前キャンプの受け入れ地域と参加国との交流という。参加国の中には紛争や災害、貧困などに苦しむ国が少なくない。真田さんは「冬季の長野大会で学校ごとに行った『1校1国運動』を発展させるべきだ。日本の子供たちが世界を学ぶ貴重な機会になるはず」とみている。

3大会連続でメダルを獲得した元柔道女子代表で日本大准教授の**田辺陽子さん**（50）は「五輪の価値をもう一段高める大会になれば」と期待する。ロンドン大会では現地のボランティアから「自分たちが五輪をつくる」という意識を強く感じた。「日本流のおもてなしで、各国の選手が実力を十分発揮できるような雰囲気をつくりあげてほしい」と力を込める。

「4年後なんて遠い世界という被災者は少なくない。1年後のことも見通せないのに……」。福島県出身の順天堂大教授（スポーツ社会学）の**黒須充さん**（57）はため息をつく。東日本大震災時は福島大に所属。福島市内の自宅は壊れ、仮設住宅で暮らした。

東京大会は「震災復興」がテーマの一つだ。聖火リレーや選手の合宿誘致

東京五輪今後のスケジュール

2016年	8月	▶野球・ソフトボールなど追加種目が正式決定
		▶リオデジャネイロ五輪
	8月以降	▶大会組織委員会予算策定
	11月	▶新国立競技場の設計まとまる。着工へ
17年	未定	▶大会マスコット発表
18年	2月	▶平昌冬季五輪
	8月	▶大会ボランティア募集開始
	8～9月	▶ジャカルタ・アジア大会
19年	未定	▶聖火リレーのコース発表
		▶新国立競技場の聖火台設置場所決定
		▶テスト大会開始
		▶入場券販売開始
	11月	▶新国立競技場完成
20年	7月24日	▶東京五輪開会式

※現段階の予定。大会開催基本計画などによる

日本経済新聞　平成28年7月24日